　　１

　　　皆さんこんにちは、今日はポインセチアのおはなしをしましょうね。

どこかで聞いたことがある言葉でしょう？

ポインセチアとはお花の名前です。でも今日はポインセチアという名の男の子のお話をします。

名前のように日本の男の子ではありません。

遠い西の方の国の小さな村に住んでいる男の子のお話です。

ではポインセチアの村に行ってみましょう。

　２

ポインセチアの村はとっても小さな村です。

村のはしには小高い山があり、ふもとのあたりに、小さな赤い屋根やキノコのような色をした屋根の家が並んでいて、村の真ん中の一本の道をずっと歩くと、村の教会の前に出る静かで小さい村です。

みんな仲良く、いい人ばかりで、とっても明るい村です。

お昼と晩に教会の鐘が鳴ると、みんなちょっと手を休めてお祈りをします。

もちろんポインセチアも！

３

ポインセチアの家は、村のはずれの一番小さい茶色の屋根の家です。

お父さんはポインセチアが学校に通うために、村の人たちの、力のいる仕事を引き受けて、一日中お仕事、お母さんも、村の人のお洗濯もののお手伝いをしてはたらいています。

ポインセチアの家は、お金持ちではありませんが、お父さんお母さんそして子犬のくん君と、しあわせな毎日を過ごしていました。

４

夕方、お父さん、お母さんのお仕事が終わり、あたりが少し暗くなりかかるころ、いつも三人で、一本道を一日あったことをお話ししながら、村の教会のそばにあるマリア様の所に、一日お守り下さったことをありがとうございましたって、お祈りに行っていました。

お父さんはいつも、「ポインセチア、マリア様のようにやさしい心の子になるんだよ」とすすめ、お母さんは、「決して嘘を言ったり、人のものを羨ましがったりしないで、いつもきれいな心でいましょうね」と、いうのでした。

５

ポインセチアは夜お父さんがパンを割ってくれる食事が一番楽しみでした。

お父さんが大きな手で三つと一寸に分けてお皿に乗せてくれる時、とっても力強いのです。次にお母さんがいつもリンゴを三つに分ける時、ちょっと大きめにお父さんのお皿に入れ、その次にポインセチアに、そして、ちょっと小さめになったリンゴを自分のお皿に入れるのです。チーズや肉は時々出ますがくん君にもちゃんと分けました。ちいさな畑で出来たお野菜を乗せた食事は貧しいけれど、とっても幸せでした。

６

ポインセチアは朝、学校に行くとき、必ずお母さんの一言を聞いてからでかけます。

「ポインセチア。いいこと。どんなにお友達が誘っても、悪いと思ったことは絶対しないこと、よいと思ったことはどんなに嫌でもやり通すこと。これを神様、マリア様に見ていただきましょうね。お母さんとがんばり競争！」それをきいてから、いってまいりますといって学校へ行くのでした。

７

　ある日のこと、もうすぐクリスマスが近くなったので、先生が「皆さんはもう、四年生だから、イエス様の徳の花の最後の日のプレゼントをどうするか　自分たちで話合いなさい」と、みんなにまかせました。皆ワイワイ意見を出し合いました。

　ポインセチアは壁に貼ってある世界地図を外して、みんなに言いました。

「みんな、世界中には、ぼく達みたいに、毎日安心して勉強したり、遊んだりできない国の子がいっぱいいるって教えてもらったよね。そういう友達のため、我慢したり、お祈りしたりするのはどう？」と意見をだしました。

みんな賛成でしたが、目に見えるかたちでないと忘れてしまうので、目的はかえないで、自分の持っているものを出し合って、教会のバザーで売ってもらい、それを献金してもらうことに決まってしまいました。

ポインセチアは我慢やつらいことを捧げるつもりでしたが、目的はとおりましたが、みんなの意見に喜んでゆずりました。

８

ポインセチアはちょっとこまりました。

自分の意見とは違い、大切なものを出し合う事になったので、自分の持物をずっと考えてみたのですが、出すものなんてなにもありません。

お父さんやお母さんに相談したら心配するし・・・。

どうしよう

　　どうしよう　　どうしよう

　　　　　石ころを、ポンと蹴りました

９

コロコロと転がった石ころを目で追ったとき

ふと目を上げると、草原に冬には珍しい大きな雑草が群がっているのが目につきました。

「あっと！決めた。ただの草だけど。きれいに花瓶にさしたら、りっぱだ。

あれをもっていこう。草花の好きな人に、買ってもらえるかもしれない。」

といって一本かなり大きいのを抜いて帰りました。

１０

その晩お父さんもお母さんも寝てしまった後、ポインセチアは、昼間とっておいた草を紙で包んで見えないようにそっとしておきました。

でもお友達のことを考えるとちょっと恥ずかしい気持ちがわき、うそが言いたい気持ちがゆらゆらします。

そうだ、ぼくすこしはずかしいけれど、いやだけど、それを我慢しておささげしよう。

そうすればイエス様は喜んでくださると思う。

そうだ、これでいい。と決心して休みました。

１１

次の日です。いよいよ、お捧げする時間です。皆は、大事なものを手に持っています。

ポインセチアだけ紙に包んで隠しています。ポインセチアは下を向いて、

「イエスさま、僕の捧げものはこの葉っぱではなく、恥ずかしいのを我慢する心です。我慢を愛に変えて下さい。献金にかえてください。」

と言い続けていました。

何度繰り返したかわかりません、だんだん番が近づくと、耳が熱くなるのがわかります。「イエス様、ぼくの捧げものは葉っぱじゃなくて恥ずかしい事を我慢する心です。」と言い終わった時

１２

「ポインセチア。紙から出しましょう。先生があけましょうか？」

「はい」

先生が紙をバリバリとあける時、ポインセチアは、（草が！！！！）と下を向いてしまいました。

むねがドキンドキンしました。

１３

「まあ！！ポインセチア！」

先生の大きな声にポインセチアはびっくりして、叱られるのかと顔をあげました。

「あっ！」　「なんだこれ！」

何と紙の中の草に真っ赤な大きな花が咲いているのです。

「ポインセチア。何処からこのお花いただいたの？」

先生も。皆も大騒ぎ、すごい花、見たことが無い、

「ぼく、ぼく、わかりません、僕ね、持ってくるものがなかったので、困って、どうしようかなって考えているとき、野原に冬には珍しい草が生えていたので、きれいに持って行けば、だれか買ってくれるかなと思って…でも、草だったのです。どうして花が咲いたかぼくにはわかりません。」

先生は、これは不思議なこと、心の清いポインセチアに神さまが下さった奇跡だと分かりました。

真っ赤な花から漂ってくる何とも言えない美しさは、ポインセチアの心のようです、

１４

ポインセチアの帰りが遅いので、心配して迎えに来たお父さんとお母さんに、先生は今日の不思議な話を聞かせました。

お父さんとお母さんに心配をかけたくなかったやさしいポインセチアの心、お捧げものに、自分の嫌だった恥ずかしいのを我慢してお捧げする強い心、イエス様を喜ばせる心に、お父さんもお母さんも先生も、お友達もみんな喜びました。

何よりも喜んでくださったのは、いつもよい行いで頑張るポインセチアを見ているイエス様とマリア様でした。だから奇跡で草に真っ赤な色の花を咲かせてくださったのです。お生まれになったイエス様をお祝いする花としてこれからずっとポインセチアはクリスマスの花と言われるでしょう。

１５

お母さんが、そっとポインセチアの肩を持って、後ろを向かせました。

イエス様の胸の上に、真っ赤に染まった奇跡の花が乗っていました。

たちまちニュースは小さな村いっぱいに響き、教会の鐘もカランコロン響きわたりました。

１６

この不思議なイエス様へのプレゼントの花は、ポインセチアと呼ばれるようになりました。クリスマスが近づくと葉っぱの先が真っ赤な花のようになるので、この草は、クリスマスの花とよばれ、ポインセチアのあたたかい心を喜ばれたイエス様の花とも呼ばれています。

みなさん、ポインセチアのように、イエス様にあたたかいこころのプレゼントをして、喜んでいただきましょう。このお花を見るたびに、ポインセチアという男の子のお話を思い出してください。そしてにっこりほほ笑んだイエス様のことを。